

開催地名：長崎県長崎市	
開催日時	令和元年 11 月 6 日（水） 14：30～16：00
開催場所	長崎大学 文教キャンパス スカイホール
語り部	吉田 亮一 （宮城県仙台市）
参加者	長崎市内の大学生及び商工会員 約 120 名
開催経緯	<p>毎年全国各地で大規模な自然災害が発生しているが、幸いにも長崎市では昭和 57 年の長崎大水害以降大規模な自然災害が発生していないことから、災害を直接経験していない若年層に対して防災意識を高める必要がある。また、地域防災力の担い手である消防団員の役割はますます大きくなっているが、消防団員数が年々減少しているため、若い世代の学生等に入団してもらい、組織の充足を図る必要がある。以上を踏まえ、語り部のお話を今後の防災意識の向上と防災活動の糧としたい。</p>
内容	<p>（1）東日本大震災の教訓について</p> <p>東日本大震災が発生したとき、想定外という言葉が飛び交った。想定外と言えばそれで終わりにになってしまうが、想定以上の備えが必要である。地域として一生懸命防災に取り組んで、せつかく共助ができて、自助が抜けていたのでは、地域防災は成り立たない。住宅の耐震化、外壁や室内の点検、食料と 飲み水は 1 週間分、ガソリンは絶えず満タンにしておいてほしい。こういうことができて、初めて地域防災が成功する。</p> <p>避難所には一時避難場所、地域指定避難所等、さまざまな避難所があり、用途が違っている。一時避難所とは、災害が起きたとき、地域が最初に活動する、安否確認と情報収集の場所である。地域指定避難所は、現住所に基づいて開設され、家が全壊、半壊して、住める状況ではない方々が避難する場所である。怖い、食料がない、電気・ガス・水道がとまったとって避難する場所ではない。だからこそ自助が大切で、1 週間分の備蓄はしてほしい。救援物資は、家も食料備蓄もなくなって避難してきた人たちのものだから、例えば、学校に自衛隊のトラックが着いたから、何かもらえるということではない。</p> <p>避難所の床に「碁盤の目」のようにスペースをつくと、真ん中の人は、通路側の寝ている人たちをまたいで通路に出なければならないし、不審者も入り込みやすくなる。体育館の中央に 2 メートル幅のメインストリートを設け、両側の壁からメインストリートに向かって、長さ 4 メートル、幅 2 メートルのブルーシートを敷く。このブルーシートを 1 メートルの間隔を空けて、櫛の歯のように並べる。ブルーシート上の 1 メートル×2 メートルが、1 人のマスである。そうすると、他人をまたぐ必要がなく、自由に通路に出られる。ここは何地区と決めておけば、歩き回る必要がなく、プライバシーも守られ、不審者も入りづらい。これを「半島型避難スペース」と呼んでいる。</p>

(2) 地域で取り組む防災活動

防災訓練を告知するには、全て班長がポスティングするか、手渡しすることにし、回覧板は使用しないほうが良い。アパートやマンションには、町内会に入っていない人もいるからである。A4判の用紙に訓練の日時、目的、内容が書いてあり、一番下に、切り取り線が入っている。切り取り線の下に、小・中・高・成人と人数を書くところがあって、「あとで回収に来ますから、書いてください」と告げる。そうすると、前もって何人参加するかが分かる。

町内会が行うのは、町内会防災である。保育園、幼稚園、小学校、中学校、福祉施設、企業、商店の全てと一緒にやることを地域防災化と言う。大人目線だから、高齢化という話になる。小・中学生、高校生を巻き込み、公民館や市民センターを使って行う老人会の受付や、学校での運動会、盆踊りでテントを張るのに、子どもたちに参加してもらえば距離が縮まる。普段からそういうことを行うことによって、災害時にもうまく回っていく。

避難持ち出し用備品や1週間分の食料よりも、最初に使う防災用品があることを知ってほしい。それは、靴下、スニーカー、ヘッドライト、防犯ブザー、イヤホンを必ずつけた携帯ラジオ、フードつきの雨具である。この6つを、ナップザックなどに入れて、押し入れや、玄関先ではなく、寝ている自分の枕元に置く。ふとんの中で動かず、身の安全を確保する。揺れがおさまったら、靴下、スニーカーをはいて、ヘッドライトをつける。そうして自分の身を守ってほしい。



開催地より

震災時の初動対応の大切さと、避難所運営について、具体的な体験談を聞くことで、非常に参考になった。今後の活動に役立てていきたいと思う。